

ロバート・O. パクストン著
渡辺和行・剣持久木訳
『ヴィシー時代のフランス
——対独協力と国民革命 1940-1944』

評者：佐伯 哲朗

(1)

1940年6月、第2次世界大戦においてフランスはドイツに降伏し、フランスの国土はその半分をドイツに占領された。フランス政府は南部の温泉町ヴィシーへと移転を余儀なくされる。ここから、ドイツ占領期のフランスはヴィシー時代と呼ばれている。

さて、本書は、そのようなヴィシー時代について1940～44年の期間を対象として、フランス人が直視することのなかった歴史の「神話」を解体しようとしたものである。著者パクストン氏はアメリカ人であるが、ヴィシー期の歴史を専門として、本書の執筆以前にヴィシー期の将校団についての著書がある。2001年版序文を除く本論の部分は、1972年に出版されており、著者が40歳の時の作品である。本訳書には、2001年版序文がつけられており、訳者あとがきによると、著者の指示による若干の加筆修正もなされているそうである。

本書の構成は、次のようになっている。

2001年版序文

プロローグ——1940年夏

第1章 対独協力を求めるフランス——1940
～42年

第2章 国民革命

第3章 体制協力者たち

第4章 対独協力1942～44年——解放と革命
のはざままで

第5章 総括——ヴィシーの遺産

著者は、2001年版序文において自らの立場、本書の位置を明示する。本書は、著者による2冊目のヴィシー論であり、新たな解釈枠組みを提示しようとしたものであった。著者によれば、その前提条件とでも言うべき背景は次のようなことである。1960年当時のヴィシーに関する標準的な歴史書の基礎にある前提は、ドイツ側公文書と合わない。標準的な歴史書とは、ロベール・アロンのヴィシー研究を指すが、彼の基本的な考え方は、4つあった。第一に、ナチによる「絶対的な命令」。第二に、この「絶対的な命令」に対して楯の役割を演じたヴィシー。第三に、ヴィシーと連合国との間の密かなダブル・ゲーム [裏取引]。第四に、フランス世論に見られた一般的な「待機主義」。それゆえ機が熟するやいなや、ドゴールの背後からであれ、地下にもぐった共産党指導部の背後からであれ、連合国の側で戦う用意があった。

このようなアロンの考え方を著者は批判する。アロンの議論は、ヴィシーの最後の日々には無理なく適合するかもしれないが、初期ヴィシー（1940年6月～1942年末）のまったく異なる状況と心性に対しては適合的ではない。「戦後の裁判証言や両陣営が対立する記憶よりも同時代の史料に依拠した」と言う著者は、ロベール・アロンの枠組みを「後から振り返った記憶の典型」として批判する。著者によれば、ドイツの「絶対的な命令」については、ヒトラーの初期の目的が相対的に控えめであったこと、その後、占領されたフランスの搾取を強めたこと、および、ヒトラーがヴィシーの対独協力提案を

軽蔑していたこと、をわれわれはすでに知っている。

アロンが立論の根拠とした第二の柱である楯の比喩は、解放期に遡る。楯の比喩を用いることで、ヴィシーの交渉戦術は非常に不正確に描かれることになった。ヴィシーは、休戦協定の条件に厳格に従って行動したのではなく、休戦協定の制限条項の解除と引き替えに、そして、中立の立場とはいえヒトラーのヨーロッパに自発的に参加することで、より快適な地位を得るのと引き替えに、フランスの譲歩を積極的に提案した。

ダブル・ゲーム説は、公文書による研究と照合されることで事実上消滅した。著者は、ドイツの側に立った対独協力と、連合国側について行うレジスタンスの2つの選択肢以外に、第三の独立した道を見いだそうとしたことを証明しようとした。占領を終わらせるためのヴィシーの重要な国際政治上の目標は、ヒトラーが支配するヨーロッパにおいては、中立国家として、またドイツの敗北の可能性が見えはじめたときには、両陣営の仲裁者として、第三の独立した道を見いだすことであった。

アロンが立論の根拠とした第四の柱については、この見解によると、対独協力は、ナチズムやファシズムの思想に共鳴するごく少数の人々のしわざでしかなかった。この見解からは、「国家による対独協力」はほとんど視野に入らなかった。「国家による対独協力」とは、思想的な共鳴のためというよりは、国家理性を追求するドイツとの計算づくで自発的な和解政策のことであった。

著者は、何年にもわたる本書への批判に対してこう反論する。ヴィシーが一種の原罪によって、すなわち1940年6月に宿命的な選択をしたことによって、完全に汚されたと論じたことは正当である。休戦協定の下、政府活動を必要不

可欠な業務の維持に制限しないで、ヴィシーは政治的復讐と排除という党派的な行動を率先して始めた。これが「国民革命」である。1940年7月11日の憲法的法律から始まった宿命的段階は、時代の必要によってではなくて、党派的な便宜主義によって導かれた。それは、1914年の賢明な「神聖連合」とは正反対のものであり、ヨーロッパの他の被占領国が実行したように、現下の諸問題をただ処理することよりも、はるかに危険に満ちていた。こうしてペタン元帥は、今日まで続く混同をつくり出してしまった。すなわち、占領されたフランスで国家の枠組みを絶対に維持する必要性と、国土の半分を占領されたフランスに残された中途半端な自由を行使して、不和をもたらす政治課題を遂行するような政府を樹立することとを混同した。ヒトラーが支配するヨーロッパのなかで、ヴィシーの「国民革命」の独自性は、「国民革命」の必然性がなかったことと同様に強調されねばならない。休戦協定は「国民革命」を要求しなかったし、ナチもそれを望まなかったからである。その結果、ヴィシー体制は汚され、欠かすことのできない日常的な活動が、いっそう不愉快な対独協力主義的な活動と結びついてしまった。こうして、普通の高潔な多くの市民は、通常彼らが唾棄するであろう行動の共犯となった。そうしたやり方で、ペタン元帥とその顧問たちは多くの善良な愛国者を裏切った。

(2)

次にプロローグ及び各章の内容を紹介したいところであるが、ぎっしりと内容の詰まった本書の叙述の仕方からして（もちろん評者の理解力の問題もあるが）、内容の詳細な紹介は不可能である。そこで、前項で紹介した内容とそれほど重複しない論点をいくつか紹介しておきたい。

ドイツが支配するヨーロッパにフランスが自発的に参加することを拒んだものは、フランス政府ではなくてヒトラーであった(301頁)。

専門家、経営者、官僚は、ほとんど無傷で生き残った。知識人や扇動家ははるかに厳しく粛清された。解放によるいわゆる行政革命は、人事の上ではほとんど衝撃を与えなかった。専門家主義の敵たちが相殺されたことで、グラン・コールは体制転換をほとんど無傷で切り抜けることになった(308頁)。ヴィシーの政策が最も顕著に生き残ったのは、行政、経済の近代化、そして計画経済の分野である。もちろん、そのつながりは必ずしも直線的ではないが、ヴィシーにおける伝統主義的な価値から専門家による行政や計画経済による近代化への変化は、フランスの政治と社会における長期的な傾向にも適合していた(321頁)。

ヴィシーにとって主権は、交渉に役立つ資産ではなく、交渉の足かせとなる負債であった。ヴィシーの指導者たちは、革命を防ぎ、さまざまな思惑でフランスをつくり直すために、1940年夏に休戦を求めた。このような目的を達成する対価として、ヴィシー体制は存続せねばならなかった(341頁以下)。

ヴィシー体制は、フランス人を苦しみから救いはしなかったし、おそらく西ヨーロッパで完全占領された国々で耐えていた人々と比べても、苦しみは軽減されなかった。

ヴィシーのエリートに対しては、厳粛な道義的追及もなされなければならない。第一に、彼らは、1940年の敗北をきわめて党派的な目的のために利用した。第二に、彼らは、フランス国内の分断をさらに促進した。第三に、ヴィシー体制は、多くのフランス人を、彼らが普段なら見過ごさないような行為や政策の共犯者にしてしまった。

ヴィシーのエリートたちは、他のフランス人

たちを、追いつめられて窮地に陥った第三帝国との共謀の深みへと引きずり込んだが、その心理的な動機は、社会的無秩序を最悪のものとして恐れる気持ちである。フランスの最高の技能と才能が、ますます怪しげな状況下でフランス国家を維持させようという目覚ましい努力となって注がれた。彼らは、国家を救いながら、国民を失っていた。彼らは、自分たちの敵はよくわかっていても、守るべきものが何かはよく分かっていなかった。かくして、判断力を欠いた彼らがこなした仕事は、それ自体は立派であるものの、体制が社会全体に及ぼした害悪に染まっていた(348頁)。

(3)

それにしても、著者の提示する情報量、体系的な把握は読者を圧倒する。叙述は、第3共和制(本訳書では「共和制」を「共和政」と表記する)についての深い理解に基づいている。著者の視野は、政治、経済の分野にとどまらず、教育などフランス社会の諸側面についても、いわば輪切りにした断面図を示してくれる。また、人口構成をも議論する。その意味で、ヴィシー時代だけでなく、第3共和制期の歴史を学ぶ上での必読本であることは言うまでもない。

著者は、「神話」と表現されることになる、思い込みやある種の先験的な議論を排除しつつ、可能な限り利用可能な史料を用いて、歴史像を多元的・立体的に解明しようとする。特にドイツ側の史料を用いているのは説得力を高めている。従って、ヴィシー時代の指導者たちについて、著者は徹頭徹尾批判的になる。もちろん、指導者やエリートでない、一般の人々も責任を逃れることはできない。「自分の仕事をこなして、倫理的で観念的な危険を冒すか、公民としての不服従を實踐して、物質的で即時的な危険を冒すか」という「厳しい選択」(349頁)

は、読者にも（もちろん評者にも）鋭く突き刺さる。

このように極めて重い内容を含む本書であるが、本書が日本語で広く読まれることによって、日本でヴィシーの歴史についての理解が深まることが期待される。戦争を含む過去の負の遺産を直視しなければならないという点では、日本人にとっても他人事ではないからである。

ただし、本書は、日本語訳で読むだけでもかなりの時間を必要とする。このような大著の翻訳にはかなりの手間がかかったと思われるが、日本語訳は専門家による正確な翻訳である。訳者の一人である渡辺和行氏は『ホロコーストのフランス』などの著書を持ち、日本におけるヴ

ィシー史研究の第一人者である。もう一人の訳者である剣持久木氏もヴィシー期に関する優れた論考を発表している気鋭の専門研究者である。日本語版の読者の一人として、訳者の渡辺、剣持両氏の作業には改めて感謝しなければならない。なお、「訳者あとがき」によれば、訳者に本書の翻訳を勧めたのは、望田幸男氏であるという。望田氏の見識にも敬意を表したい。

（ロバート・O. パクストン著（渡辺和行・剣持久木訳）『ヴィシー時代のフランス—対独協力と国民革命 1940-1944』柏書房、2004年7月刊、423頁、定価5200+円+税）

（さへき・てつろう 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）

必要な情報やデータが一目でわかる！

◆インターネット、テレビ、新聞、雑誌ではわからない！
日本の「現在」と「将来」がワカル

世界地図で読むシリーズ

伊藤正直 編

各巻 定価（本体二〇〇円＋税）
A5判変型 並製一二四頁

★シリーズ①

グローバル経済

グローバル化の起動力となる金融経済、自由貿易、国際機関、多国籍企業、金融機関などのありようや、モノ・カネ・ヒト、情報のグローバル化の現在を、特徴的なテーマに絞ってデータを整理・図解。

★シリーズ②

情報とテクノロジー

情報・技術はどのような段階にまで達したのか？ 情報・技術の経済的・産業的側面は？ 企業や国家は情報・技術をどのように位置づけているのか？ グローバル化と情報・テクノロジーとのかわり方は？

★シリーズ③

環境破壊と再生

激増する異常気象、猛威を振るう自然災害、破壊される自然、砂漠化する大地、投棄される有害廃棄物……環境と地球は両立できるのか？

★シリーズ④

開発と人間

肥満人口が三〇%を超えるアメリカ、栄養不足人口が五〇%を超えるコンゴ。不平等を拡大しない経済開発は可能なのか？

旬報社

東京都文京区目白台二一四—一三
TEL 03(3943)9911
TEL 03(3943)9911
FAX 03(3943)8396
E-MAIL info@jumpscha.co.jp